Thank you

佐山まりる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ

【Ｎコード】
Ｎ０１９０Ｔ

【作者名】
佐山まりる

【あらすじ】
「僕は、基本的に、自分だけで生きていけるように作られた。」
孤独な主人公に、友達ができる話。
ＢＬじゃない・・・はずです。

冬が嫌いだという人は多い。だけど、晴れた冬の日の、澄み渡った空が嫌いだという人は少ないと思う。特に早朝。雲の白とも、空の青ともつかない、その薄い色は、僕の心を空白にそめあげる。

だから、白い息を吐き出したその時、僕の心には、何も浮かんでいなかった。

冬になると、日が昇るのが遅くなる。空が明るくなってすぐ、ベランダに出て空をみあげるのが、冬休みに入ってからの、僕の日課となっていた。このときだけ、僕は何も考えずにいられる。これからしなければいけないこと。僕が僕として生きるために、必要なこと。頭の中をめぐっている、そんなことが、このときだけは、すっかり抜けてくれる。

僕は、基本的に、自分だけで生きていけるように作られた。誰によって、と問われたならば、自分によって、というのが答えだ。

僕の両親は仕事しか頭にない人たちで、僕は小さいころから、家で一人になることが多かった。だから、生きるのに困らないように、僕は、僕のために、僕をそのように作り変えた。

「……」

何も言わず、息だけを吐き出す。白い吐息は、寂しさを訴えているように見える。

両親は、今は寝ている。だが、あと数分もすれば起きてきて、自分で朝食を作り、用意をして、気がつくと出社しているだろう。家族との会話はない。彼らは、必要のないことに、時間を割かない。悲しいのは、血筋なのか、僕もそれを当然と思ってしまうことだ。

もうすぐ、両親が起きてくるころだ。僕は、もう部屋に戻ろうと思い、視点を空から地面に移した。

そして、心臓が止まりそうになった。

そこに、僕の家の前に、中谷がいた。偶然、家の前を通り過ぎた

のではなく、明らかに意図して、こちらを見上げている。その様子を見れば、僕が隙だらけで空を見上げていたのも、ずっと見ていたのだろう。心底意地の悪い奴だと、僕は思った。

僕と目が合うと、奴はニカリと笑った。

「おはよう」

「……おはよう」

その図々しさに呆れて、僕は「プライバシーの侵害だぞ」とも言えず、素直に返答してしまった。

「あのさ、俺、数学でわからないところがあって、龍崎に聞きにきたんだけど」

「はあ」

どうして僕に？僕はそう思った。僕と中谷はそれほど仲がいいとはいえない。むしろ僕は、奴と友達になるというのは、ごめんなのだ。わざわざ僕に聞きにこなくても、他にも友達がいるだろうに、なぜ僕に聞きにきたのだろう。

僕のそんな疑問がわかったのか、中谷は笑顔のまま、続けた。

「ほら、俺の家と龍崎の家って、近所だろ？龍崎って頭いいしさ、せっかくだから頼もうと思って」

僕は頭がいいわけじゃない。こうして誰かに質問しなきゃいけないのは困るから、自分で勉強しているだけだ。そう反論したい気持ちを押さえ、僕は「あがったら」と声をかけた。さすがに家の前まで来られたら、追い返すのも気がひける。

「ありがと！」

彼がいそいそと玄関に向かうのをみて、僕は何度目になるかわからない思いを、痛切に感じた。

やっぱり、中谷は苦手だ。

中谷英也という男は、僕のクラスメートだ。はっきり言っておくが、僕は彼が嫌いである。

僕は社交的ではないが、クラスのほとんどの人間と話したことはあり、それなりに友好的な関係を築いている。最初も彼とは、ほどほどに仲良くしようと思っていた。

だが、彼の明るさは、僕にとって脅威だった。

「消しゴム貸してくれない？」

これが、中谷との最初の会話だった。

「なんだ、忘れたのか？」

僕がそう尋ねると、彼は笑顔のまま、否定した。

「だってほら、筆箱から出すの、面倒でさ」

普通の人からみると、何でもない会話なのだろう。だがそれは、僕にとって衝撃的だった。このとき、僕と中谷は、初対面に近い関係だったのだ。「面倒だ」という理由だけで、他人をわずらわすという考え方は、僕にはなかったし、今まで出会ったこともなかった。

僕が黙って消しゴムを渡すと、中谷は、「ありがと！」と笑顔で礼を言った。

そのときの僕の気持ちを、どう表現したらいいだろう。僕は独りで生きてきたし、これからも、そうするつもりだ。だが、中谷の謝礼で、その気持ちが吹き飛んでしまいそうな気がした。

だから、僕は彼を恐れた。

同時に、彼を憎みもした。彼はあまりにも、僕の生き方を否定していたから。

謝礼のことがなくとも、すぐに他人に借りをつくる彼の姿は、僕の神経を逆撫でした。彼を見ているだけで、僕はイライラした。そのくせ、彼は僕に笑顔を向けてくる。それがさらに、僕のいらだつ原因となった。

僕は、中谷英也が嫌いだ。

ただ、ふと疑問に思うことがある。中谷は、僕が中谷を嫌っていることに、気づいているのだろうか。

僕には判断がつかない。

僕の家に押しかけるところをみると、気づいていないようにも思

える。だが、周りにたよってはいるものの、彼がそれほど鈍い男だとは思えないのだ。
これは、中谷に直接聞いてみるしか、わからない。

「誰？」
「僕の……クラスメート」
両親は、自分の家にいる見知らぬ少年に、驚いた様子だったが、僕の知り合いと知ると、何事もなかったかのように、出勤していった。相変わらず、他人には興味のない人達だ。
「それで、どこがわからないんだ？」
「ああ、図形のところなんだけど」
僕は呆れてしまった。図形は、冬休みに入るずっと前に、終わったところだ。予習ならばまだしも、テスト範囲でさえないのに、わざわざ聞きにくるのも、ご苦労なことだ。
胸のうちを言葉にせず、僕は順々に、平行線から、合同、四角形のところまで、中谷に説明した。平行線や図形の性質、合同の決定条件、定理の証明。最も説明が困難だったのは、証明そのものの説明だった。文章になると、どこをどう書けばいいかが、それぞれの場合で違ってくるものだから。最終的に僕は、
「問題を解いていけばわかる。問題集でも買って、やれ」
と、押し切った。
ただ、不思議だったのは、中谷は、わざわざ聞きにくるほど、わかっていないわけではないらしい、ということだ。英語は、かなりいい点数らしいので、頭が悪いわけではないだろう。そもそも、本当に頭が悪いのならば、勉強する気も起きないだろうけれど。
気がつくと、一時間が経過していた。
「他にわからないところは？」
「ない、かな」
それなら、ということで、僕は教科書やノートを片付け始めた。

その横で、中谷はなぜか、まだ悩んでいる。でも、僕は面倒なので、声をかけなかった。
「終わったんだから、もう帰れよ」
「やっぱり、ある」
「は？」
脈絡もなく、告げられたその言葉に、僕はぬけた返答しかできなかった。
「質問だよ。考えてみたら、あったんだって」
それなら、はやく言えばいいのに。大体、あんなの確認だったのに。不満が高まったが、僕が言い出したことなので、再び教科書とノートを取り出そうと立ち上がった。
そんな僕にかけられた、唐突な一言。
「どうして、龍崎は頑張ってるの？」
その一言で、僕の足が止まった。
「すべて自分だけでできるように、龍崎は頑張ってるよね。どうして？」
知られていた。その信念は僕にとって当然のことだったはずだ。なのに、恥部を知られたかのように、頬がカッと熱くなった。
「……それは、数学のことじゃないだろ」
必死でしぼりだした僕の声は、どのように聞こえたのだろう。中谷は、普段と変わらない口調で、のんびりと言った。
「だけど、俺は知りたいんだって」
僕は、何と言えばいいのかわからなくて、何も答えなかった。中谷も、何も言わない。その状況で、何分が経過しただろう。折れたのは、中谷だった。
「じゃあ、明日も来るし。答えは、その時に、ってことで」
捨て台詞な言葉を残し、彼はあっさりと帰っていった。条件反射のように、彼が閉じていったドアの鍵を、ガチャリ、と閉める。
そうして僕はようやく、冷静になれた。
そして、呆然としていたときは気づかなかったことを、思い出し

た。
「アイツ、明日も来るって？」

翌日の朝は、雪が降っていた。北陸の雪は水分をたっぷり含んでいて、さわるとすぐに、指先が濡れる。空はどんよりと曇っていて、僕の気分を憂鬱とさせた。
ベランダは、寒い。
雪にふれて、今さらだが、そのことに気づいた。室内に戻ろうかとも考えたが、あと五分だけ、待ってみようと思いなおした。
待つ？
いや、そうじゃない。これじゃあ、まるで僕が、中谷が来るのを楽しみにしているみたいじゃないか。
「おーい、龍崎！」
気がつくと、ベランダの下に中谷が立っていた。人目も恥じず、大きく手を振っている。
やっぱり、来たのか。
中谷の存在が、曇った空よりも、僕の憂鬱さを重くする。
「おはよう」
明るくかけられた挨拶だったが、返事を返したい気分じゃなかった。僕は黙ってベランダから部屋に入り、玄関の鍵をあけにいった。

「昨日、龍崎のアドバイスに従って、証明の問題が載っていた問題集を買ってみたんだ」
ご丁寧に、中谷は問題集まで持ってきていた。今日は休日だが、両親は二人とも出張に行っていて、この家にはいない。
「今さらだけど、どうしてこんな朝早くに来るんだ？」
「え？だって、龍崎はこれぐらい早くから、起きてるだろ。冬休みの初めごろに、偶然、通りかかったことがあってさ」

当然のごとく言われ、返す言葉もなかった。起きているからいいのか。まだ七時だぞ？
「それで、どんな問題集を買ってきたんだ？」
「あ、それより」
「なんだよ」
せっかく見てやろうと思ったのに、出鼻をくじかれ、多少不機嫌になりつつ、僕は言った。
「昨日の答え」
息が止まるかと思った。中谷が自然に、それを口にするものだから。
「どうしてお前に言わなきゃならない」
「あれだよ。僕が、知りたいから」
無邪気な台詞に、言葉がつまった。そんなことを言われると、拒絶している自分が馬鹿みたいに思えてくる。
でも、何でこんな奴に、自分のことを話さなきゃならない。
「俺は中谷の生き方を知った。だから、その報酬と思ってくれればいいよ」
俺はため息をついた。こいつみたいに、自分の要求をストレートに伝えれば、生きるのは楽だろう。
「まあ、座れよ」
そして、僕は自分のことを語った。
両親に手をかけられなかったこと。
だから、自分のことは自分でできるように、小さいころから自分を変えていったこと。
あくまでも、自分を変えたのは自分だと思っていること。決して、両親のせいではないこと。
僕が思っているすべてのことを、話した。
もしかしたら僕は、聞いてもらいたかったのかもしれない。僕のつらさを。僕の思いを。胸のうちに秘めたそれらを、誰かに知ってほしかったのかもしれない。

中谷は、普段の軽薄さが嘘のように、一度も口をはさまなかった。僕の話が終わっても、しばらく口をとざしていた。
「ありがとう」
最初に口にしたのは、やはりその言葉だった。いつものように笑顔ではなく、真剣な顔で、中谷はそう言った。それだけで、僕は中谷に話してよかったと、そう思ってしまった。
「食事とかも、自分で？」
「そうだな。料理はできるようにしたし」
「お金は？」
「え？」
「お金。自分で働いてるの？」
「いや、違うけど……。父さんが、毎月、三万円くれるから」
どうして、こんなに聞いてくるのだろう。僕は漠然とした不安を感じながら、慎重に答えた。
「言っていいかな、龍崎」
「何を？」
見ると、中谷の顔は、いつになく真剣で、笑顔が浮かんでいない。
「龍崎は勘違いしているよ。龍崎は一人で生きていけやしない」
生き様を見抜かれたときのように、頬が熱くなった。あの時と違うのは、頬を紅潮させているのが、今度は怒りだということだ。
「どういうことだよ」
「龍崎は親からお金をもらってるだろ。それって、一人で生きてるとは言わないんじゃないかな」
そんなことか、と少し落胆した。それは、「一人で生きる」という意味の、捉えかたが違うだけの話だ。
「そんな屁理屈、反論になってない」
「それだけじゃないよ。龍崎が食べてるものは、龍崎がつくったもの？着てる服は？違うよね。作る人、それを売る人、経由させる人、たくさんの人の上に、龍崎の生活は成り立ってるんだよ」
言い聞かせるような、中谷の口調。僕を丸め込もうとする彼の台

詞に、苛立つ気持ちだけが大きくなっていく。
「僕が言っているのは、そういう話じゃなくて」
「Ｄｏ　ｙｏｕ　ｔｈａｎｋ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ？」
急にはさまれた英語。そうだ、中谷は、英語は上手いんだった。頭の中で翻訳した内容に、心が冷静になった。中谷の屁理屈に、納得したからではない。中谷が伝えたいことが、わかったからだ。
あなたは世界に感謝していますか？
中谷はいつも、礼を言う。それは彼が、自分の生活が、誰かに支えられてできたものだと、知っているからだったのだ。
そう、中谷が言ったとおり、僕が食事をできること、服を着て家に住めること、学校で勉強ができること、それらはすべて、自分ではない誰かの助けがあって、成立している。
僕は、考えたこともなかった。両親がお金をくれるのも、僕が一人で生きていけるのも、当然だと思っていた。感謝したこともなかった。
ようやく納得した。中谷は、僕の知らない大切なことを、知っていた。それゆえに、礼を言う中谷が、眩しく見えたのだ。
「だからさ、少しぐらい、周りに助けを求めたって、いいんじゃないかな」
君はとうの昔から、周りの人に助けられて生きているんだから。彼が言いたいことは、僕の生き様の否定であり、僕が納得してしまう理由だった。
僕は、目の前で、ニヤニヤ笑っている中谷を見やる。こいつは、僕が思っていたよりも、頭のいい人間だった。
悪いけど、中谷。僕は、今さら両親に甘えることなんて、できやしない。だけど僕は、僕が思ったよりも弱いことを知った。
だから、僕のことを知っているこいつに、助けを求めるぐらいは、いいかもしれない。
「……と」
「え、何？」

すでに中谷は、いつもの、どこか抜けた中谷だった。
まったく、肝心なところを聞き逃すなんて、馬鹿な奴だ。
僕は、中谷のように笑い、ちょっとばかし格好つけて、言い放った。

「ありがとう」

窓の外では、まだ何色にも染まっていない、真っ白な雪が、ただ静かに降っている。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
稚拙な文章だったと思いますが、読者様の暇つぶしにでもなっていれば嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0190t/

Thank you

2011年5月7日15時40分発行